



歪んだ喪

Warped Mourning

ロシアと日本の慰霊の条件

アレクサンドル・エトキント

×

東浩紀

2018年 2月17日 (土) 14時～17時

東京大学駒場キャンパス18号館ホール
通訳あり、入場自由 (予約不要・無料)

国際シンポジウム「歪んだ喪 ロシアと日本の慰霊の条件」(主催 東京大学教養学部表象文化論研究室・ロシア語部会)
講演:アレクサンドル・エトキント「歪んだ喪 人の手による破局のあとで」“Warped Mourning: The Aftermath of Man-Made Catastrophes”
討議:アレクサンドル・エトキント+東浩紀(司会 乗松亨平)

スターリン期ソ連のテロルは、ナチスのホロコーストに匹敵する惨事だった。にもかかわらず、テロルの犠牲者はいまにいたるまで十全な喪の対象となりえていない。慰霊を阻み、犠牲者たちを亡霊のように回帰させてしまう文化的条件は何なのか。靖国問題など「歪んだ喪」を同様に抱える日本と、いかなる共通点があるのか。チェルノブイリと福島原発事故跡地の観光化にとりくんできた東浩紀をまじえて語りあう。

アレクサンドル・エトキント… 1955年生。現代ロシアを代表する文化史家。ケンブリッジ大学教授などを経て、現在は欧州大学院教授。西欧近代という強者から疎外されてきたロシアのマゾヒスティ的・自傷的アイデンティティを、その文化史に見定める仕事をつづけている。邦訳に「ハードとソフト」(『ゲンロン7』所収。『歪んだ喪』(2013)の部分訳)ほか。